

人間性の涵養 (三)

倉 橋 惣 三

人間的に受取られることは、信頼感を生ぜしめる。それが裏切られるときには不信のこゝろを生む上に、人間としての不満、広く人間というものへの不満となる。幼児の世界のことは、どうせ小さいことである。しかし、その子にとつては大きいことである。従つて人間的経験としては深刻でもある。事件の内容は——殊におとなから見てもいゝようなことであつても、当人としては深刻たらざるを得ない。それが、その事件としてとなく人間全体への不満となるとき、その一生への印銘は極めて大きい。或は、その子にある人間性そのものを覆えずことであるかも知れない。——そういうことが案外世にないといえないのである。生れながらにして人間性の無いものは決してない。たゞ案外多くの者が、人間性の失望によつて、そのたんに、人間性を奪われるのである。幼児にとつて不幸これに過ぎるはない。

殊に、人間性の強く濃厚を幼児において、その失うところ

が多い。『此の小さき者の一人を躓かす者は寧ろ大なる硬児を頸に懸けられ悔の深処に沈められん方益なり』幼児に人間性を裏切らせる者は、すなわち彼である。しかも、この恐ろしいことが、何の心づきもなき不用意の中に行われているのである。恐ろしい。幼児に接するもの慎しむべきである。人間性は識らぬ時に養われ、識らぬ時に破られる。

人間性を失わせることは、人間的意識過剰によることが屢々であり、それは屢々倫理観念の喚起によつて冷却され、硬化されることも屢々である。幼児教育において、修身の教育が細かく警戒せられなければならぬというのもその故である。道徳は、人間性の結実であるが、また屢々、人間性を枯渴させる。折角く愛と知らず愛を持している子を、愛と知らせることによつて、愛の人間性を失うことも多いのである。人間性は人間と人間との接触において経験せられるといつた。その接触は意識にも至らない淡い場合こそ、最安全であ

る。眞実である。淡々たる間に、涵養されるのが貴い人間性である。人間性の涵養を、語を設けて説くときに、人間が人間の面をかぶり、人間を意識するのでもあろう。確しかな人間性の教育。しずこゝろなく咲き、しずこゝろなく散りて

こそ花の美である。花を鑑賞する人も亦、そうでなければならぬ。花は識らない。美しい〜というは詩人の言である。詩になるとき、既に、どこかに作為がある。謡になりるおいておや。幼児の人間性は朝の露の玉の如し、さわれば濁る。美しい〜ところがせば、地に落ちて、こわれもするであらう。かすかにして、かすかなるがゆえに実在するものは幼児の人間性である。

人間性の涵養というとき、おとなの人間性が涵養主体となるようにも聞こえる。しかも、そのとき、おとなにしてもかすかな場合のみが、幼児の人間性を涵養するのである。

赤色黄色に染めるのではない。寧ろ多くの場合、洗淨するのである。色や味の、こどもらしくもなくついているとき、洗い落として、人間性の純白になすのである。そこに、人間性涵養の自然がある。——母が我子を愛するとき、自ら愛を意識しない。母性愛は、道徳的善でもない。その母に、我子を愛しているかと問うとき、格別、愛してもいないとしか覚えなないであらう。我子を愛さなければならぬとか、子は愛されなければならぬとか、思惟していないであらう。——だか

らこそ、その純愛に涵養せられもするのである。生母においてこそ、子は無心の愛に涵養せられるのである。

子の親におけるも、そうでありたい。「孝」という教えほど、親子の間を倫理化するものはない。冷くするものはない。固くするものはない。少くも「孝」は訓えであつて、涵養ではない。——親子の心の間の人間性が涸れた場合にあつたのみ、楷書で書いた「孝」の訓えが必要になるでもあろう。

私は儒教的修身教育を、幼児教育において好まない。孔子は豊かなる人間性を説かない人ではない。しかし、訓とするとき余りに整い、余りに一般的に適用されんとする時、孝の種類や、孝の厳しさが論ぜられて、孝の人間性のたのしさを、一本流露の自然が欠かれる。私は、一、三才の幼児には親と一般の語や文字を対象としての、孝の訓えを説くことを、怖れもする位である。親と子との間に通る人間性でこと足りる。『親と子との人間性、そのほかに修身訓はなくもがな』とも言おうか。